

月刊

2020

10  
月号

# みんぱく

特集

## 世界の地相術



景観の「科学」 河合洋尚  
インドのヴァーストゥ・ヴィディヤ 柳沢究  
日本の家相 宮内貴久  
中東の土占い 西尾哲夫  
ヨーロッパのフィジオノミー 渡邊欣雄

# 堂木と「大東輿地図」に見る環境単位

齊木 崇人

プロフィール  
1948年広島県生まれ。神戸芸術工科大学  
1948年広島県生まれ。神戸芸術工科大学  
学長、筑波大学専任講師、神戸芸術工科大学  
教授などをへて現職。工学博士（東京大学）  
1987年には日本建築学会賞（論文部門）  
を受賞した。おもな著書に『スイスの住居・  
集落・街』（丸善）、『円相の芸術工学』（共著  
工作舎）などがある。

私たちが実体験を通してイメージする場所や空間の認識は、科学的な測量技術や写真技術で測り作られた地図よりも、プリミティブな地図や画像の表現と適合することがある。

私は、建築学の視点から日本の集落空間の構成原理と地形立地の研究をまとめた後、韓国の集落を目指した。一九八七年八月から一〇年、崔宗絃さん（漢陽大学）と約三〇〇の集落を巡った。

集落の立地する凹型地形の入り口に、必ず堂木と呼ばれる一本の太木があった。堂木の下に立ち、周りを見回すと、水が潤す水田の向こう正面に案山がある。振り返れば集落と集落を護る主山がある。その主山から両腕を伸ばした稜線が集落と水田を包んでいる。自然の地形が集める水系と、集

落の内と外をつなぐ道との結節点に、集落の背後の主山からやってきた神の使いとする堂木があった。

調査の中途、崔宗絃さんから李朝期に金正浩（号・古子山）が自ら歩いて作成した「大東輿地図」（復刻版）を頂いた。木版印刷による縮尺一六万八〇〇〇分の一、朝鮮半島の白頭山から済

州島までを南北三段に分割し折り本とした地図の箱を手にした時、驚愕した。縦五メートル、横三・五メートルの巨大な朝鮮全図に私たちが堂木を求めて巡った集落の空間構成と、後方の山やまに

連続する国土の構成が、見事に書き込まれていた。情報量は極めて少なく、山やまの尾根線が「龍脈」として黒々と分岐し、その間の水系が地図の骨格をなしている。それと対照的に直線で書かれ一〇里ごとに目盛の入った道が主要施設とともに記載されている。つまり山と水と道のシステムを三種類の線だけで、集落と都邑を形成する集水域を環境単位として可視化しながら朝鮮半島の全体像が構築化されていた。

この地図の原本は未だ発見されていない。筑波大学図書館で明治期の朝鮮半島調査資料を探索中に、偶然に彩色された「大東輿地図」を発見した。その地図を韓国のソウル大学に照会すると、韓国にも現存しない最も古い写本であった。

私はその後、韓国の集落調査ではこの折り本を縮刷版にしてポケットに入れて活用した。

近代以降の地形図の表記から消えてしまった「尾根線」と「水系」の復元が、集落の環境単位を示し、同時に朝鮮半島全体の地形や空間秩序まで読み取れることを可能にしてくれた。

こうして、私がフィールドワークを通して体感した空間認識は、集落計画と環境デザインの実現手法「空間ブロックダイアグラム」となった。

- 12 みんぱく Information
- 14 世界のバスケットリー×バスケットリーの世界  
海の民とバスケットリー  
小野 林太郎
- 16 みんぱく回遊  
越境する食  
謝 春游
- 18 シネ倶楽部 M  
重層的な人物描写が描き出す、  
秘められた苦悩の歴史  
——「判決、ふたつの希望」  
菅瀬 晶子
- 20 ことばの迷い道  
多言語の国インドの教室にて  
岡田 恵美
- 21 次号予告・編集後記

- 1 エッセイ 千字文  
堂木と「大東輿地図」に見る環境単位  
齊木 崇人
- 2 特集 世界の地相術  
景観の「科学」  
河合 洋尚
- 4 インドのヴァーストゥ・ヴィディヤ  
柳沢 究
- 5 日本の家相  
宮内 貴久
- 7 中東の土占い  
西尾 哲夫
- 8 ヨーロッパのフィジオミー  
渡邊 欣雄
- 10 ○○してみました世界のフィールド  
中国の教会の過去と現在を訪ね歩く  
新居 洋子

月刊  
みんぱく

10月号目次



# 世界の地相術

近年、人間（身体）と環境を切りわけず連続的にとらえる思考や行為に、注目が集まっている。本特集では、人間の命運を向上させるために土地・家屋の相を判断する五種類の地相術を比較する。

## 景観の「科学」

かわい ひろなお  
河合 洋尚

民博グローバル現象研究部

人間はしばしば成功や災いの原因を、周囲の物的環境に求めることがある。「あの土地は運氣が良いから成功者が多い」、「家族がうまくいかなのは祖先の墓が悪いからだ」などのようにである。本特集では、土地の状態をみて人間の命運や行動を判断する技術を、地相術とよぶ。

世界各地の地相術はさまざまであるが、その出発点は、景観に神秘的な力を求めることにある。特別な道具を使って土地の吉凶を判断することもあれば、土や砂を投じてその相を判断することももある。大地などの景観が人間の運勢を伝えるという古くからの教えは、西洋科学では長いこと「迷信」として片付けられてきた。だが、非西洋社会の地相術は、高度な思想や技術を伴う「伝統科学」として今でも存在している。中国に由来する風水は、その典型例である。

環境が破壊されたなら、そこに住む人びとに災いがふりかかるといっているのである。

### 身体イメージと景観

身体イメージから土地を判断するタイプの地相術は、中国以外にもみられる。インドでは、紀元前から発展してきたヴァーストゥ・ヴィディヤという実践がある。人体をもとに空間を設計し、建築物や都市を造る地相術である。

こうした思考形態は、我々の身近にも潜んでいる。奥三河にあった母方の祖父母の家でのこと。ある日、祖父が病気になるため、祖母が祈禱師にみってもらったところ、「物干し場を造るために打ち込んだ杭が地の神の猿田彦の手に突き刺さったからだ」と告げられたという。土地や家屋が原因でそこに住む人間に災いがふりかかるといふ発想は、家相にもある。日本では、こうした思考様式に基づいて、家の方位、間取り、形状の良し悪しを判断する家相の術を発展させてきた。



魯班尺(上)と羅盤(下)。吉凶の文字が入っており、吉の寸法または方角に合わせて測定する(筆者所蔵)

### 風水と人間

風水の原型は紀元前に求められるが、紀元後、景観の良し悪しを判断する技法として体系化された。風水の原理によると、人間の命運と景観の状態は「気」という生命エネルギーでつながっている。だから、人間は成功するために良い土地を選び、そこに村落や家・墓を作ろうとする。風水学は難解な哲学でもある。そのため、風水師という専門家が、羅盤や魯班尺などの専門の道具を使って、理想的な位置・方位・寸法を測定する。

ただし、中国各地で実際におこなわれる「風水」には、かなりのバリエーションがある。わたしが中国東南部で見聞した「風水」の多くは、「気」という概念もなければ、羅盤や魯班尺も使われない。人びとは、「この建物は自殺者が多いから風水が悪い」とか、「この村は想像動物や吉祥動物



蛇の頭の形をした地形。風水がいいというので、その頭の部位に墓を立てている(中国、広東省、2004年)

### 西洋近代科学と地相術

一九世紀後半以降、西欧の宣教師や人類学者は、中国で風水をみて、それをジオマンシーと名づけた。本来、ジオマンシーは、中東の「土占」を指す。投じた砂の形状から、人間の命運を判断するタイプの地相術である。風水と同様に、占星術とも密接にかかわっている。ただし、ジオマンシーは、建造物の位置や形状を判断する技法としては発展しなかったため、風水とは性質を異にする。だが、当時の西欧人の眼には、環境と人間の命運を不可分なものにとらえる「迷信」



香港、新界の民家に掲げられた横断幕。数キロメートル離れた地点に高層ビルが建てられたため、村民の健康が損なわれたと抗議している(2009年)

(龍、蛇、犬、亀、鶴など)の身体に似ているから風水が良い」というだけである。また、中国広東省、香港、台湾で共通して耳にしたのは、家や墓の形状を人間の身体に見立てる説明である。そして、もし人間や動物の身体に見立てたその

として、風水もジオマンシーも似たようなものに映ったのかもしれない。

見逃すことができないのは、かつて西洋にもフィジオノミーという地相術があったことである。古代ギリシャに起源をもつフィジオノミーは、もともと人間の身体の特徴を読み解く術であった。それはやがて、景観の相貌をみる術として発展し、近代西洋地理学の礎ともなった。西洋地理学は、この地相術から徐々に脱皮することで、近代科学としての地位を確立していったのだ。

次頁以降では、ヴァーストゥ・ヴィディヤ、家相、ジオマンシー、フィジオノミーについてさらに掘り下げていく。これらの事例をとおして、西洋近代科学にならなかった「景観の科学」の一端をご覧いただければ幸いである。



梅県の集合住宅「圍龍屋(いりゅうおく)」の後方にある高台。子宮の部位にあたるため、神聖視されている(中国、広東省、2016年)



# インドのヴァーストゥ・ヴィディヤ

柳沢 究

京都大学准教授

古代インドの建築 (Vastu) に関する知識・学問 (Vidya) の体系を、ヴァーストゥ・ヴィディヤという。建築学、建築論と言い換えてもよい。ヴァーストゥ・シャストラという呼称もよく用いられる。こちらはそのような建築理論をまとめた「書」の意である。ヴァーストゥ・ヴィディヤのもっとも古い記述は、紀元前一五〇一〇世紀ごろの『リグ・ヴェーダ』(古代インドの聖典) 中の住居神への讃歌にまで遡り、紀元後六世紀ごろには現代に伝わるものの原型がインド各地に普及していたと考えられている。さまざまな時代・地域のテキストが存在するが、基本構成は共通する。工匠の神ヴィシュヴァカルマンへの祈りに始まり、建築家の資格、職人組織、敷地選定、計算法、

測量法、寸法体系、部屋や建物の配置、建築各部の形態、建築材料、建設前後の儀式にいたるまで、建築にまつわるあらゆる領域を体系的に網羅している。また、ヒンドゥー教のコスモロジーを色濃く反映し、寺院や住居などの単体建築のみならず、集落や都市のレイアウトをも含んでいる。

## ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ

具体的な建築を計画する際のツールとして使われるのが、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラである。プルシャは「原人」などと訳され、ヴァーストゥ・プルシャとは、土地や建築がもつ力を、人体を象りつつ神格化した存在である。ヴァーストゥ・ヴィディヤでは、建物を建てる敷地にヴァーストゥ・プルシャが頭

を東北、足を南西にして横たわっていると考える。その敷地を八×八や九×九の区画に分割し、ブラフマーを筆頭とするヒンドゥーの神々を配置したものが、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラである。ヴァーストゥ・プルシャは人体



インド有数の実業家家族が住む超高層住宅「Antilia」(高さ173メートル、27階建ての個人宅)。アメリカの建築事務所「ヴァーストゥ・ヴィディヤ」に沿った設計を依頼したという。近年建設される高級住宅では、集合住宅も含め、ヴァーストゥ・ヴィディヤに基づく設計をうたうものが多く見られる(ムンバイ、2013年)

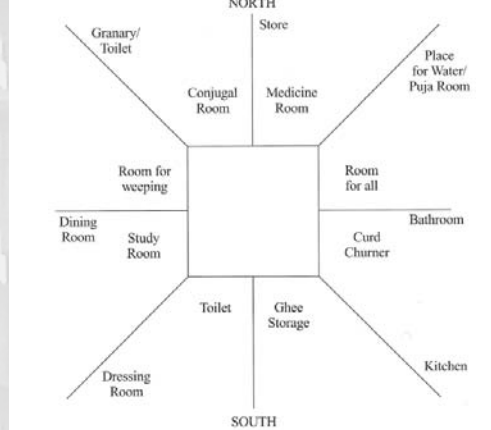
の、神々の居並ぶマンダラは宇宙の表象であるから、その土地と建築は、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラを通じて、宇宙と人体というふたつの大きな秩序に接続するのである。ヴァーストゥ・プルシャの身体部位や配置された神々は、建物内の機能配置を規定する。例えば、中心部はブラフマーの座であるから構造物を置かず中庭やホールに、頭部にあたる東北の隅は祭祀室に、足にあたる南西の隅には不浄なトイレを、南側は死の神ヤマの領域であるから入口を避ける、といった

具合である。このような方位の解釈は、モンスーンや昼の日射が直撃する南西の方位が嫌われ、朝日の入る東が尊ばれるというように、環境的条件の反映という観点からも理解することができる。

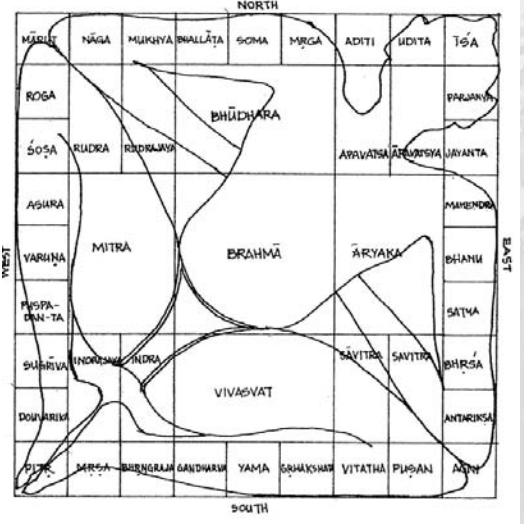
## 現代におけるヴァーストゥ・ヴィディヤ

ヴァーストゥ・ヴィディヤを考慮した家づくりは一九世紀までごく一般的であったが、二〇世紀の近代化のなかで廃れていったという。しかし二

〇世紀末以降、ヴァーストゥ・ヴィディヤへの関心が再び高まっている。経済成長に伴う消費社会化・グローバル化のなか、伝統的価値観が活性化しているのがある。書店には関連書籍が多数並び、多くの専門家が活躍している。しかし、その知識体系としての全体性はほとんど無視され、扱いやすい方位論や部屋の配置論ばかりが注目されがちである。意欲的な建築家により、インド的なアイデンティティを表現するためのデザインとして現代的に翻案されることも多い。



右 | ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラ (9×9の例)  
上 | ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに基づく諸室配置の例 (出典: Chakrabarti, V., Indian architectural theory: Contemporary uses of Vastu Vidya, 1999)



# 日本の家相

宮内 貴久

お茶の水女子大学教授

## 可視化できる家相

家相とは家屋の間取り・向き、付属建物との位置関係などから、その家の吉凶禍福を判断する考え方で、陽宅風水説に強い影響を受けている。家屋の中心を設定し、そこから二四方位を割り出してその吉凶を判断する。例えば、北東方位は鬼門といわれ、便所など不浄物を建てるのを避ける。他方、地相とは家屋が建つ土地の吉凶を判断する考え方である。屋敷地の形状や、周辺の山や川、道路との位置関係などから判断される。

家に災いをもたらす原因は本来見えないものであるが、家相は家屋や付属建物など建造物を

対象とするため、何が家屋の災いなのか見せることができる。それが家相図である。家相は一八世紀後半から流行し定着していった。次に、一九世紀末から流行し定着していった。次に、一九世紀末から二〇世紀初頭の家相図を、山形県の事例から見てみよう。

## 家相見渋谷常蔵

渋谷常蔵(一八六九〜一九三二年)は、一九世紀末から二〇世紀初頭に山形県置賜地方で活動した家相見である。図1は常蔵が記した、自宅のある長井市九野本周辺の二五軒の家相略図である。うち一部に残された記載によると、明治二九(一八九六)年旧暦八月二十七日から九月二二日

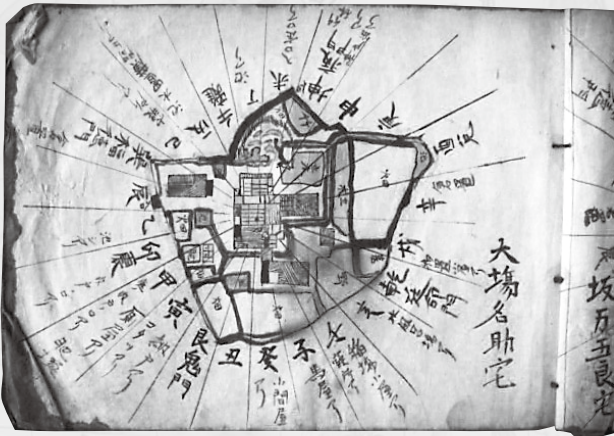
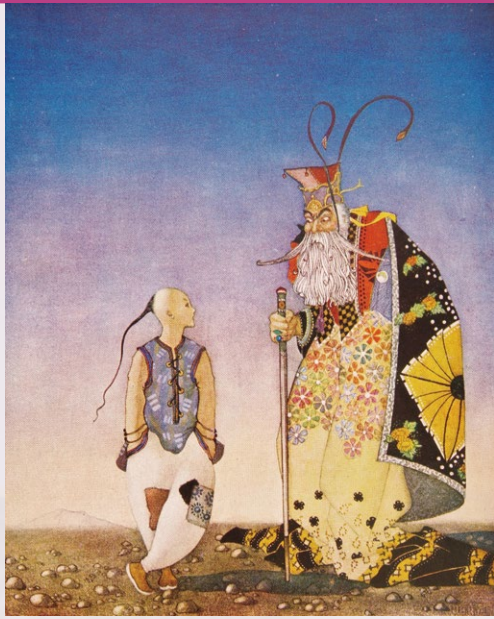


図1 | 1896年に渋谷常蔵が作成した家相略図(個人蔵)





「アラジンと魔法のランプ」に登場する魔術師  
 (出典: Arthur Ransome, *Aladdin and his Wonderful Lamp. In Rhyme.*  
 Illustrated by Thomas Mackenzie, 1920)

ここにでてきた土占いは、英語では「geomancy」アラビア語ではイルム・アツラムル、つまり「砂(ラムル)の知識・科学(イルム)」とよばれる。長旅に出かけるときなどにはさまざまな事象を占うために土占いを利用したが、実際の土占いで占星術の知識が必要となつた。知識のない素人の土占いのなかには土の上に描いた模様を読み取るだけの者もいたが、専門的な土占いは金属製の土占いや占星術の道具一式、天体観測器などを使用した。土

占いには複雑な計算が必要であり、点を無作為になぞることができる四本の線によって図形を描き、線上の点を数えたさいに出現する偶数と奇数の組み合わせから一六種類の図形のひとつを導きだす。これにホロスコープやそのときの支配星などの占星術の知識を援用して最終的な判断をおこなう。中国や東アジアにおけるいわゆる風水とは、概念においても実践においてもかなり異なっている。

# 中東の土占

西尾哲夫

民博グローバル現象研究部

アラビアンナイトと土占

中東で成立した物語集『アラビアンナイト(千一夜物語)』を代表する話のひとつ「アラジンと魔法のランプ」には、土占いをあつかった一節が登場する。

同物語集を世界にさきかけてフランス語に翻訳したガラン版によると、中国のある町に暮らしていた怠け者の少年アラジンのもとに、亡き父の弟であると自称するアフリカの魔術師がやって来る。魔術師は土占いの術に通じており、これを用いてさまざまな秘密を探りあてた。

〔魔術師には土占いの術に通じた弟がおり〕  
 弟は(中略)土占いの小箱を身につけて

ました。弟は小箱をとりだして砂を用意すると点をつけて線を引き、ホロスコープを描きました。ホロスコープに出現した宮を読みとくと、兄はもはやこの世にはいないことがわかりました。別の宮からは兄が毒を盛られてすぐに死んでしまったこと、別の宮からは一連のできごとが中国で起こったこと、さらに別の宮からはそれが都のある場所でおこなわれたこともわかりました。そして兄に毒を盛ったのが卑しい生まれの男であることもわかったのです」

(西尾哲夫訳『ガラン版千一夜物語』岩波書店、二〇一〇年)



ティムール朝の君主で天文学者でもあったウルグ・ベクが西暦15世紀にサマルカンドに建設した天文台の跡(2008年)

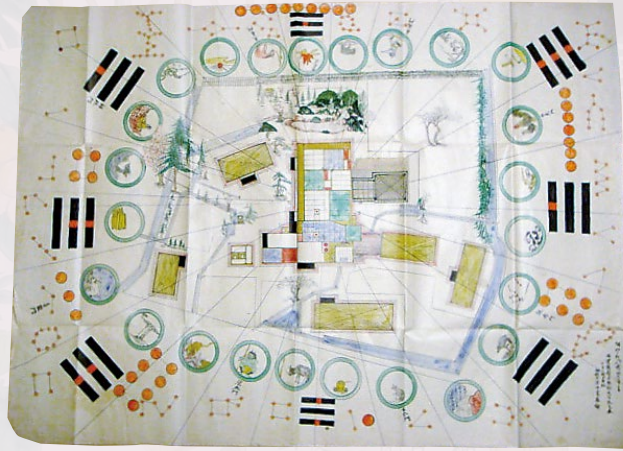


図2: 1917年に渋谷常蔵が作成した家相図(個人蔵)

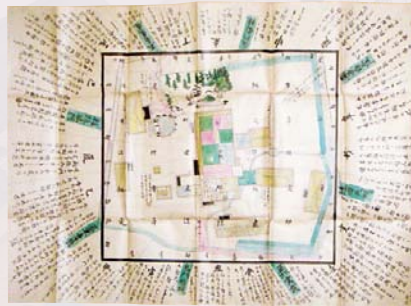


図3: 1917年に渋谷常蔵が作成した地相図(個人蔵)

の一六日間で五軒の図を作成している。わたしは図に記された家々をすべて訪ねたが、正式な家相図を所蔵している家はなかった。作成時の常蔵は二七歳であり、修行のために家相略図を作成したと考えられる。その後、常蔵は大正六(一九一七)年に東置賜郡川西町小松の肝煎りを務めた名家の家相図を作成した。『家相自宅使用』という冊子に、家相図(図2)と地相図(図3)がとじられている。パステルカラーを多用した印象的な図が特徴である。また、同家の家相と地相について詳しく記された文章も添えられている。このほかにも常蔵は川西町や西置賜郡飯豊町の旧家の家

相図も作成しており、置賜地方では著名な家相見だった。こうした家相は過去の習慣というわけではなく、今も生き続けている。その一端が家相の絵解きである。

家相の絵解き  
 わたしが彼女を初めて見たのは、二〇〇七年一月の奈良県天理市の商店街だった。赤く縁取られた大型の絵図の最上段に「家相之位神秘公開」と記されている。女性はこの絵を棒で指しながら、家屋を身体に見立てて、「陰/陽」、「男/女」、



天理本通り商店街での家相の絵解き(2007年)

「世間の法則」ということは家相を絵解きしていた。表札など対処しやすい部分を絵解きし、帰宅後すぐに実践できるようにアドバイスをしていた。商店街を行き交う多くの老若男女が足を止めて絵解きに聞き入っていた。彼女の名前は能木とめ

という。兵庫県宝塚市清荒神に本部がある、足立信夫が立ち上げた日本家相協会に所属している。二〇一四年四月一日付『朝日新聞(夕刊)』では、「香具師の芸をたどつて、オトモダチにも仁義切る」という記事で香具師として紹介された。夫が足立のところで家相の絵解きをしていたが、夫の死後、仕事を引き継いだ。兵庫県西宮市の西宮神社で一月に開催される十日戎、愛知県名古屋市中区で一〇月に開催される大須大道町人祭などで家相の絵解きをおこなってきた。彼女の話術に魅入られた人も多いだろう。



以来の天文学の遺産が伝承されており、砂漠を移動するベドウィンは、アンワー（兄弟星）とよばれる、天体の動きに関する実用的な知識を蓄積していた。さらにギリシア等の学問をイスラーム世界が継承し、天文学と数学が一体となり、正確な礼拝時刻を確定するための計時科学（イルム・アルミーカート）が発達した。モスクではムワツキトとよばれる専門職が礼拝の時刻を決めていた。ムワツキトという名称は、イスラーム初期の記録には出てこないが、一三世紀のエジプトでは

役職が置かれていたらしい。中世の天文学者のなかには、占星術師としての仕事をする者も多かったが、イスラームの立場からいえば占星術は容認されないものであった。イスラームの天文学者は、モスクと結びつくことによって、イスラーム科学の衣を纏って伝統的な宇宙観を固守しようとしたのであり、ヨーロッパにおいては逆に教会と袂をわかつ結果となったが、科学としての天文学と占星術の関係に同じような現象が生じたといえる。

# ヨーロッパのフィジオノミー

わたなべ としお  
渡邊 欣雄 東京都立大学名誉教授

フィジオノミーとは

フィジオノミー (physiognomy) とは、元来人相そのものや人相術のことだったが、意味は拡大して、ものの外面的特色、土地などの外形、地相をもあらわしていた。訳語は多様だが、「顔の容貌、景色の全体」を「相する」(総合的に観察する) という意味で「相貌術」としておきたい。起源は遠くギリシアにあり、人間の身体、特に顔の特徴を読み解いて、その性格を知る方法であった。一七世紀の自然観察や芸術世界に広まり、当時は性格判断に用いられていた。

つまり相貌術は、外なる自然界と内なる道徳界との関係を探ろうとする術だった。一八世紀、

オランダの医師カンパーによって発展し、一七七五年から一八一〇年にかけてもっとも流行する。相貌術とは当時は、人間の外面と内面との対応目に見える外観と目に見えない性格との対応についての判断だった。

ヨーロッパ近代地理学とフィジオノミー

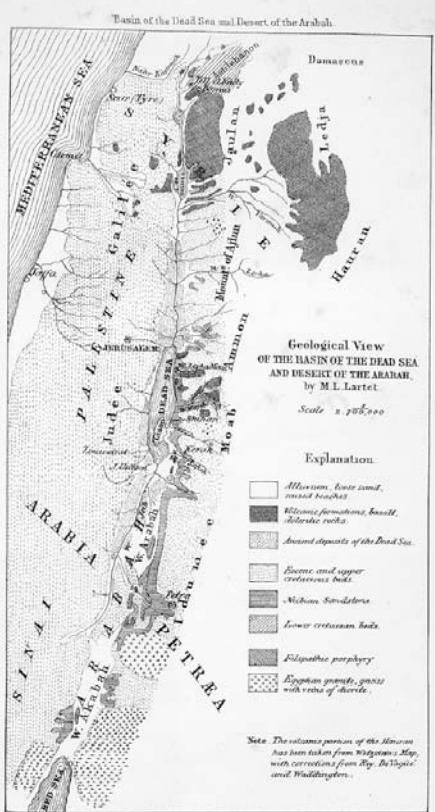
こんな相貌術を動機とした学問、それがヨーロッパ地理学だった。ドイツ近代地理学を築いたのは、A・フォン・フンボルトとC・リッターである。彼らが残した業績はかなり違うが、共通した思考法が相貌術だった。フンボルトはその著『コスモス』で大陸配置、地質地形、気象気候、

動植生を描いたが、直観的に現地の民族の自然に対する物の見方、考え方を探ろうとしたのだった。

対してリッターは世界地図を凝視し、または旅行先で通訳者にたよらず、土地が直接に語りかけてくる現象を読み取る解読法を用いていた。彼も地球上に生起する現象を、人間と自然とを貫く生命体として、全体的関連のなかでとらえていた(岩田慶治『草木虫魚の人類学』淡交社、一九七三年)。現代地理学の祖であるF・ラツェルも、「相貌地理学」をカンヴァスにして地理学を築き上げたのである。

A・フォン・フンボルトの相貌地理学

さてフンボルトによる相貌的な景観把握は、まとめると、以下のような特徴によっている(山野



M. L. Lartetによる死海盆地およびアラバ砂漠の地勢図  
(出典: Carl Ritter, translated by William L. Gage, *The comparative geography of Palestine and the Sinaitic peninsula* v.3, 1866 本館所蔵)

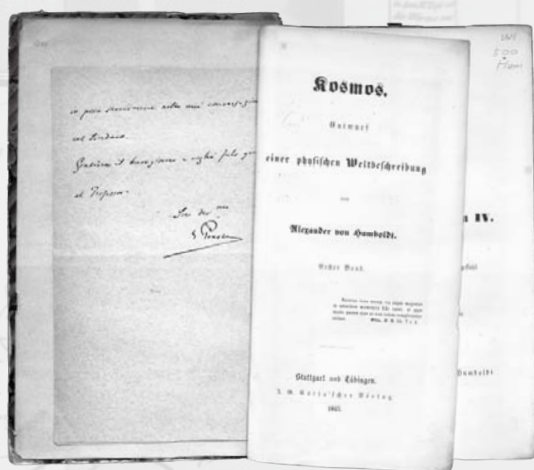
つまり周囲の景観は観察者が観た直観的な像であり、相貌術とは環境の直観的観察法だということだ。リッターの考え方も、外面の姿を图示して内面

正彦『ドイツ景観論の生成——フンボルトを中心に』古今書院、一九九八年)。

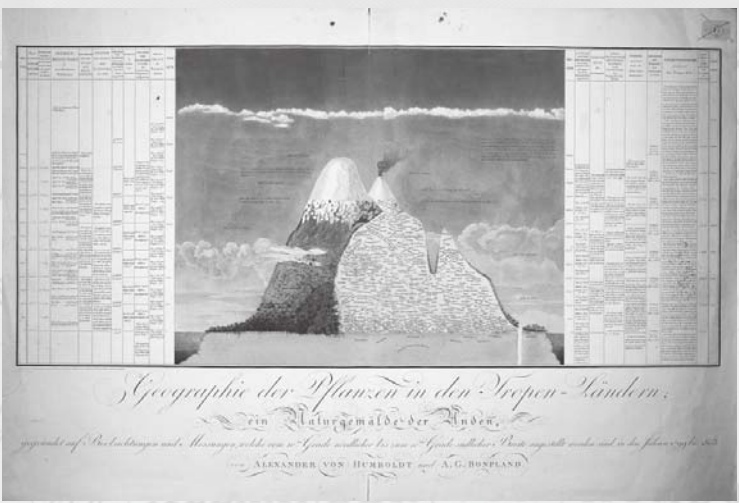
- ① 景観の相貌は、植生、岩石、土壌、川や湖、空・月・星、そして動物や人間などを構成要素としている。
- ② 一定のローカルな地方内にある右記構成要素が、ひとつの統一ある全体(ゲシュタルト)をなし、独自の性格をあらわすものとする。特に植生が景観の相貌を強く規定する。
- ③ 観察者の直観による全体印象に基づいており、観察者の脳裏に描かれる像は外界の反映である。それは観察者の心に感情をわきおこさせる。
- ④ 相貌の違いを科学に求めたりもするが、基本は外にあらわれた形態から、その外部形態の原因たる感慨(イデー)を内部で探求しようとする術である。

感情を探ることであり、生き物としての大地を把握することだった。

ここに現代の科学偏重の地理学とは異なる、ヨーロッパ近代の地相術としての、直観的環境判断を中心とした地理学の特徴が見取れるのであるまいか。



『コスモス』第1巻 (Alexander von Humboldt, *Kosmos: Entwurf einer physischen Weltbeschreibung* Band 1, 1845 本館所蔵)



フンボルト  
「熱帯地域の自然画」  
(1807年)  
エクアドル、チンボラソ火山の植物分布がさまざまな観測データとともに示されている (Wikimedia Commons)



エジプトのアズハル・モスクに設置された日時計



〇〇してみました世界のフィールド

# 中国の教会の過去と現在を訪ね歩く

新居 洋子  
日本学術振興会特別研究員

ライデン大学で開催された国際アジア研究会議にて(二〇一九年)  
教会を探して  
迷い歩いてみました



数百年前に活動していたキリスト教宣教師の思考を知るためにはどうしたらよいか……。歴史を掘り起こすために現代中国のフィールドを巡り歩く文献研究者が、出会った教会の過去を紐解く。

## 文献研究者が「歩く」意味

わたしは、明・清時代の中国で活動したカトリック宣教師について研究している。そのためわたしにとつての「フィールド」とは、まず何よりもこれらの宣教師による報告や、彼らが参照した漢文や満文(満洲語)の文献、当時中国で作成された関連公文書などを所蔵するヨーロッパや中国語圏の図書館、文書館だといえる。

とはいえ図書館や文書館へ行くだけで、二六〇一八世紀の中国で宣教師が考えていたことやそれを取り巻く文脈をすっかり再現できるわけではない。宣教師たちが日々どのような通りを歩き、どのような人びとと接していたのか。何を食べ、どんな気候のもと、暮らしていたのか。このようなことは、文献を読むだけでは意外とわからない。



濟南最大のプロテスタント教会、經四路基督教堂。この日は日曜礼拝に集まった信者で2階席まで満杯だった(2010年)

そこで現地の教会(中国語で「教堂」を訪ねてみる)になる。もちろん、

当時から長ければ数百年の時間が経っているわけで、災害や戦禍で原形がわからなくなっているものも多く、そうでなくとも現況から当時の様子が直接わかるわけではない。しかし堂内で祈る人びとの姿を眺め、信者たちのくつろいだ雑談を小耳にはさみ、周囲の通りを歩くことで、若干の痕跡を「感じる」ことはできる。

## 中国各地の教会を訪ね歩く

このようなあまり理由らしくない理由から、わたしは諸用で中国のさまざまな地方を訪ねるたびに、その地の教会を訪ね歩くことにしている。

鬱蒼とした真夏の緑のなかに灰色の煉瓦造りの礼拝堂が静かに建ち、月並みで恐縮だが「天空の城」を髣髴とさせる妙に現実離れた佇まいで、時を忘れてみとれてしまった。とはいうものの、建物はしっかり現役で、回廊にはびっしりと洗濯物がかけられ、それもあいまって独特の雰囲気を出していた。

敷地全体はかなり広く、礼拝堂の近くには中国式の美しい庭園が併設されている。あとで調べてわかったことだが、この敷地はもともと清代の画家戴鏞の別荘で、李樹という官僚へ売却され、「菴園」の名を冠した庭園がつくられたとのこと。また礼拝堂と同じ様式で「精神科」の文字が掲げられた建物もあり、これも気になったのであとで調べてみると、戴荘天主教堂は九四八年に人民解放軍に接収され、精神病院として使用されていたようである。



中国、済南市

一般的には、中国に対してはキリスト教のイメージがあまりないかもしれないが、信者は人口の七〇パーセントといわれ、教会も各地に点在している。地図は現地に着いてから調達し(わたしはガラケーユーザーのため、オンライン地図が使えない)、「教堂」と書かれている場所にペンで丸をつけて、基本的には徒歩で、遠方の場合にはバスかタクシーで行く。なおわたしは超がつくほどの方向音痴なので、最終的には運頼りである。人に聞くという選択肢もあるが、口頭で東とか西とか何キロメートルとかいわれても理解できないのが方向音痴だ。また、こんなバクチ性の強い調査に公費を使うわけにはいかないので、かかる費用はすべて私費である。こうなるともはや、研究というより趣味である。

## 山東省済南市で出会った教会

研究であれ趣味であれ、目指す教会に着くことができたときはうれしい。特に印象に残っているのは戴荘天主教堂である。二〇一〇年八月、とある現地調査の手伝いのため山東省済南市を訪れたのだが、調査がひと段落し自由時間がもたらえることになったので、市内の教会をまわることになった。最終的にカトリックはふたつ、プロテスタントは三つの教会を訪れることができたのだが、郊外北部にある戴荘天主教堂は、さんざん道に迷い不安と暑さと疲れて絶望しかけていたところ、突然目の前にあらわれたのであった。



戴荘天主教堂・礼拝堂の正面(2010年)

この教会にはラテン語と漢文の石碑が掲げられている。ラテン語のほうには「P. Jos. Feindtmetz S.V.D.」、漢文のほうには「聖言会司鐸福若瑟」とある。「S.V.D.」および「聖言会」は、ドイツ出身のアーノルド・ヤンセンが一八七五年に創設したカトリック修道会のひとつ、神言会のことである。戴荘天主教堂こそは、神言会から初めて中国へ派遣された宣教師ヨゼフ・フライナーデメッツ(中国名:福若瑟、一八五二〜一九〇八年)が設立した教会なのであった。ここを訪れたときは恥ずかしながらフライナーデメッツの名も、このような経緯も知らず、帰国後に調べてはじめてわかり、驚いたのであった。迷い歩くことで得られる発見もある。



フライナーデメッツの事績を記念する石碑(漢文)(2010年)



重要なお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、本館関連の催し物について、本コーナーに掲載の情報も含め、急遽、予定を変更する可能性があります。詳細につきましては、決まり次第本館ホームページに掲載いたします。何卒ご理解のほど、お願い申し上げます。

特別展

「先住民の宝」

世界には、「先住民」と呼ばれる人たちがいます。先住民とはだれか？「宝」にこめられた思いとは何なのか？本展覧会では日本のアイヌをはじめ、北欧、カナダ、オーストラリア、中南米、アフリカ、台湾、ネパール、マレーシアなど、世界各地に暮らすそれぞれの「先住民」が大切にしている「宝」を展示します。

会期 10月1日(水)～12月15日(火)

会場 特別展示館

■関連イベント

みんなく映画会

「斧は忘れても、木は覚えてる」

日時 10月10日(土) 13時30分～16時30分  
(13時開場)

会場 本館講堂

解説 盛田茂東洋大学アジア文化研究所  
客員研究員)

司会・解説 信田敏宏(本館 教授)

※参加には事前申込が必要です。くわしくはみんなくホームページをご覧ください。

ワークショップ  
「ペーパークラフトでトータルボールをつくろう」

日時 10月31日(土)、11月1日(日)

13時～15時30分(12時30分受付開始)

会場 本館くろぎスペース

講師 田主誠(版画・造形作家)

対象 岸上伸啓本館教授(併任)

小学生以上

(小学3年生以下は保護者同伴)

※要事前申込(先着順)／定員各回22名、参加費300円

※申込期間 10月1日(木)～定員に達し次第締め切り

※会場は変更になる場合があります。

ワークショップ

「アイヌの矢作りと模擬狩猟体験」

日時 11月7日(土)

13時30分～15時50分(13時受付開始)

11月8日(日)

10時20分～12時40分(10時受付開始)

会場 特別展示館地下休憩所

講師 岡田恵介、山道陽輪(公益財団法人)

アイヌ民族文化財団(職員)

齋藤玲子(本館 准教授)

対象 小学4年生以上(小学生は保護者同伴)

(併)

※要事前申込(申込者多数の場合は抽選)

定員各回22名、参加費300円、要特別展示観覧券

※申込期間 10月13日(火)～10月20日(火)

※会場は変更になる場合があります。

梅棹忠夫生誕100年記念企画展

「知的生産のフロンティア」

みんなく初代館長を務めた梅棹忠夫が残したアーカイブス資料とデジタルデータベースをとおして、ワールドワークから著作への「知的生産をくわしく紹介します。このたび、会期を延長して開催する運びとなりました。

会期 12月1日(火)まで  
会場 本館企画展示場

みんなく映画会第49回みんなくワールドシネマ

「僕の帰る場所」

日時 11月7日(土) 13時30分～16時30分

(13時開場)

会場 本館講堂

司会 菅瀬晶子(本館 准教授)

解説 田村克己(本館 名誉教授)

※要事前申込(先着順)／定員160名、参加無料(要展示観覧券)

※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配布します。

【申込方法】

本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。

友の会維持会員・正会員(電話先行受付)

(定員30名)

期間：10月6日(火)まで

【申込先】千里文化財団友の会事務局

電話 06-6877-8893

(9時～17時、土日祝を除く)

一般受付

期間：10月7日(水)～11月5日(木)

オンライン予約

みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

メール・電話予約

【申込先】千里文化財団イベント予約受付

メール yoyaku-event@minpaku.ac.jp

電話 06-6877-8894

(9時～16時、土日祝を除く)

※定員に満たない場合、11時から本館2階講堂前にて当日参加を受け付けます。

公開講演会

「フアンタジの挑戦

——もつとこの世界を想像しよう」

「この世界のどこかに穴があいていてその向こうには不思議な世界が広がっている」とい

みんなくセミナー

会場 本館講堂

※要事前申込先着順／定員各回160名、参加無料(展示をご覧ください)

※事前予約の方は入場整理券を当日11時から本館2階講堂前にて配付します。

第503回 10月17日(土) 13時30分～15時(13時開場)

アイヌ文学の世界——韓・日との比較

講師 北原モコットウナシ(北海道大学アイヌ・先

住民研究センター 准教授)

齋藤玲子(本館 准教授)

【申込期間】

一般受付

期間：10月15日(木)まで

※友の会(維持会員・正会員)電話先行受付は終了しました。

第504回 11月21日(土) 13時30分～15時(13時開場)

ミュージアムが社会を変える——水俣の遺産

講師 平井京之介(本館 教授)

【申込期間】

一般受付

期間：10月12日(月)～16日(金)

一般受付

期間：10月19日(月)～11月19日(木)

【セミナーの申込方法】

本人を含む2名まで。定員になり次第受付終了します。右記の該当期間中にお申し込みください。

友の会(維持会員・正会員)電話先行受付(定員30名)

【申込先】千里文化財団友の会事務局

電話 06-6877-8893

(9時～17時、土日祝を除く)

一般受付

オンライン予約(定員100名)

みんなくホームページのイベント予約サイトよりお申し込みください。

当日参加申込(定員30名)

定員はオンライン予約状況によって変動します。11時から本館2階講堂前にて受け付けます。

みんなくウィークエンド・サロン  
研究者と話そう

会場 第5セミナー室

※申込不要(当日先着順)／定員各回42名、参加無料(要展示観覧券)

本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」「調査している地域」「国の最新情報」「みんなく展示資料」について分かりやすくお話しします。

10月4日(日) 14時30分～15時15分(14時開場)

カナダ北西海岸先住民文化の歴史と現状

話者 岸上伸啓(本館 教授(併任))

10月11日(日) 14時30分～15時(14時開場)

ネパールの先住民運動

話者 南真木人(本館 准教授)

10月18日(日) 14時30分～15時(14時開場)

オラン・アスリと精霊

話者 信田敏宏(本館 教授)

10月25日(日) 14時30分～15時(14時開場)

旅と映画とマヤ民族

話者 鈴木紀(本館 教授)

※各イベントについてくわしくは、みんなくホームページをご覧ください。

※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時～17時(土日祝を除く)です。

刊物紹介

■上羽 陽子、山崎 明子 編

『現代手芸考——ものづくりの意味を問い直す』

フィルムアート社 2,400円(税別)

なぜ人はものをつくるのか——。文化人類学、ジェンダー研究、美術・工芸史、ファッション研究……さまざまな視点から、いちばん身近なものづくり=「手芸」の輪郭をあぶり出す。「つくる」「教える」「仕分ける」「稼ぐ」「飾る」「つながる」の6つのアプローチで迫る、はじめての手芸論。



国立民族学博物館友の会 電話 06-6877-8893 (9時～17時、土日祝を除く) FAX 06-6878-3716  
https://www.senri-f.or.jp/minpaku\_associates/ E-mail minpaku@senri-f.or.jp

友の会

友の会講演会

【聴講方法】

①本館講堂にて聴講(定員160名)

友の会会員は予約不要(当日会員証提示)

一般は500円(受付フォームより要事前申込)

②オンライン中継での聴講(友の会会員のみ/受付フォームより要事前申込)

※受付フォームは友の会ホームページ内にあります。

第505回 10月3日(土) 13時30分～14時40分

特別展「先住民の宝」関連

トータルボール——カナダ北西海岸先住民の宝

講師 岸上伸啓(本館 教授(併任))

北アメリカ北西海岸地域にある先住民の村々には、動物や人間などの姿を彫りこんだ巨大な木柱が、多数立てられています。それらはトータルボールとよばれ、現在ハイダやクワクワクワクワなど各民族の宝であり、象徴です。トータルボールとは何か、その歴史の変遷、現在の制作状況とそれに関連するポトラッチ儀礼について解説します。あわせて、みんなくの前庭に立っている新旧2本のトータルボールの制作についても紹介します。

※特別展関連の友の会講演会は、みんなくフリーパスをお持ちの方も無料で聴講いただけます(本催しも該当)。

●受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/505form/

第506回 11月14日(土) 13時30分～14時40分

呪術として生き残った仏教

——社会主義期モンゴルにおける世俗化・仏教実践・還俗ラマ

講師 島村平(本館 准教授)

ノ連を中心とした旧社会主義国では、無神論が標榜され宗教が抑圧されていたことが知られています。しかし社会主義期、宗教は無くなっていたのでしょうか。この講演では、かつて社会主義国だったモンゴル国を事例に、社会主義による世俗化は、実は呪術化「だった」のではないかと、という逆説を提示します。モンゴルは、人口の6割ほどがチベット・モンゴル仏教を信じている「仏教国」です。本講演では、モンゴル仏教の現在から過去を見ていきます。

●受付フォーム https://www.senri-f.or.jp/506form/

う感覚」が紡ぐフアンタジの現代世界での役割とは何か？ その創造の現場から考えます。

日時 11月6日(金) 18時30分～20時30分  
(開場17時30分)

会場 日本経済新聞社 大阪本社 カンファレンスルーム

対談 森見登美彦(作家)

西尾哲夫(本館 教授)

司会 相島葉月(本館 准教授)

主催 国立民族学博物館 日本経済新聞社 後援 岩波書店

※要事前申込(先着順)／定員100名、参加無料

お問い合わせ先  
研究協力課研究協力係  
06-6878-8209

●みんなく無料シャトルバスのご案内  
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくの間の直通送迎バスを特別展「先住民の宝」の会期中に運行します。

※くわしくはみんなくホームページをご覧ください。

共催展  
「佐々木高明のみた焼畑  
五木村から世界へ——」

佐々木高明氏(元民博館長の撮影した五木村での焼畑に関する写真を中心に、民具などの資料を含めて当時の村の暮らしを紹介いたします。

会期 10月3日(土)～11月29日(日)

会場 五木村歴史文化交流館  
(ヒストリアテラス五木谷)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

主催 五木村、国立民族学博物館





# 世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

## 海の民とバスケットリー

小野 林太郎  
民博人類文明誌研究部

バスケットリーは海とともに暮らす人びとの生活のなかにも存在する。植物を編み組みして作られ、漁や航海の際になくならない道具として使用されているのだ。本稿ではそんな海のバスケットリーの多様性を紹介したい。

東南アジア島嶼部からオセアニアにおける海域世界には、海や沿岸環境での暮らしに特化した海民ともよべる人びとが各地に見られる。東南アジアでは、フィリピン南部からマレーシアのボルネオ島、および東インドネシアの島々に広く暮らし、かつては家舟居民や専業漁師として知られたサマ（バジャウ）人はその代表格だろう。一方、オセアニアの島々では、限られた陸上資源を補うべく、先史時代から海産資源が重要な役割を果たしてきた。特に離島域では、今でも島民によるさまざまな漁撈活動が活発におこなわれている。ここでは、そんな海の民にまつわるバスケットリーを紹介してみたい。

ラタンを使った笥と籠  
バスケットリーとしての漁具を代表するのは、何といっても笥であろう。マレー語ではブブとよばれることが多い。ボルネオ東岸に暮らすサマ人も

罫漁にブブを使うことがあるが、近年ではむしろ大型化がより容易な籠の利用が一般的だ。笥漁は、淡水域で発達したこともあり、ボルネオでは熱帯雨林や内陸地に暮らすダヤク族らも多様な笥を製作・利用してきた。その多くはタケがおもな素材となり、ラタン（籐）は部分的に利用されるのが一般的だ。これに対し、海の民であるサマ人は、籠や漁に使うロープとして、ラタンを好んで利用する。これらのラタンは通常、舟でアクセスしやすい沿岸近くの森林や彼らの村落がある島内で採集したものである。しかし、サマ人が漁に使う籠の素材も、近年では金属や化学繊維が主流となりつつある。



海ダヤク族のタケ製笥 (H0002596)



上：アタフ環礁島の沿岸部に育つタコノキ（ニュージーランド、トケラウ諸島、2008年）  
下：サマ人作製のタコノキの葉で編まれた敷物 (H0198217)

それでもラタン製の籠は、サマ人の伝統的な商品である塩干魚の運搬用に利用されたりしている。こうした風景は、土地をたぬことも多いサマの漁民や、かつての家舟居民も森林資源を積極的に利用しながら海辺での暮らしを営んできたことを想起させてくれる。

タコノキと多様な利用  
東南アジアからオセアニアの島々での生活に欠かせない植物がタコノキ（パンダナス）だ。沖縄でもアダンとして知られるが、マレー語ではパンダンとよばれ、学名となるパンダナスの語源にもなっている。タコノキは熱帯や亜熱帯の沿岸域を好み、海水への耐性も強い。またその葉は強く、しなやかで編みややすく、古来、バスケットリーの材料としても利用されてきた。タコノキは、バレーボール程

の大きさの実をたくさんつけることでも有名だが、ポリネシアやミクロネシアの島々では、食用としても利用されてきた。黄色に熟した果肉はほのかに甘く、デザートとして食べられている

といった印象だ。しかし、バスケットリーとのかかわりでより重要なのは、その葉を編んで作られた敷物であろう。東南アジアのサマ人は切り取った葉を染色したうえで、編み込み、美しい文様の敷物を作ることもある。家舟や杭上家屋で暮らす際には、こうした敷物が寝る際にも大いに役立ったことであろう。ほぼ同じような利用法は、オセアニアの各地でも見られる。西ポリネシアにあたるサモア諸島の約五〇〇キロメートル北に位置するトケラウ諸島の環礁群でも、タコノキは重要な植物資源として認識されている。その実は食料として、フルーツのように食される。一方、その葉はサマ人とはほぼ同じようなプロセスで編まれ、敷物へと変身していく。また敷物と同じく、タコノキの葉から編まれる重要な道具が、航海カヌーの帆である。伝統



タコノキの葉を編んで製作されたチェエエメニ号の帆 (H0004975)



アタフ環礁島の女性がタコノキの葉を編む様子（ニュージーランド、トケラウ諸島、2008年）

的なオセアニアの航海カヌーでは、潮風にも強いタコノキの葉を編んだ帆がもつとも好まれた。クラ交易で有名なトロブリアンド諸島のクラ・カヌーも、また民博に展示されているサタワル島の大型航海カヌー「チェエエメニ号」の帆もタコノキの葉で編まれている。海の民にとって、バスケットリーは重要な漁具ともなり、航海道具でもあったことを示す好例であろう。



## 越境する食

総合研究大学院大学博士後期課程 謝 春游

もシンボライズされた、ある文化に特徴的な「象徴としての味」である。

**越境する料理**

さて、味覚としての実際の味がどのように移動するのかについて、日本における中華料理の代表格である「エビチリ」を例に見てみよう。この料理は、日本の文化展示「多みんぞくニホン」セクションに展示されている中華料理店「安楽園」のメニューにある。じつは、エビチリは、日本で四川料理の父とよばれている陳建民の創作料理のひとつである。四川では、この料理は「乾焼蝦仁」または「乾焼明蝦」とよばれ、乾燥した唐辛子（または豆板醤）と蝦を汁気がなくなるまで炒めた料理である。エビチリという名前は、エビと唐辛子を指す「チリ」を合わせたものだと考えてよい。しかしながら、一九五〇年代に、唐辛子の辛さに慣れない日本人のために、陳建民は試行錯誤の後、唐辛子の量を減らす代わりにトマトケチャップを加え、卵を使ってまろやかさを出すという作り方に辿り着いた。その後、この料理は陳建民の店「四川飯店」から日本の中華料理屋へと広まっていった。

とはいえ、乾焼蝦仁または乾焼明蝦は、近現代の中国で刊行された中国料理または四川料理に関する書籍にはほとんど出てこない。エビと唐辛子の料理なら、「辣子蝦」

ヨーロッパ展示  
「変動するヨーロッパ」セクション



ヨーロッパ各地の移民エスニックショップの  
インスタントラーメン

中国地域の文化展示  
「華僑・華人」セクション



各国の中華料理店のメニュー (H0274426 ほか)

日本の文化展示  
「多みんぞくニホン」セクション



右：ケbab店の看板 (H0274584)  
下：中華料理店「安楽園」のメニュー  
(H0274826)

アメリカ展示  
「食べる」セクション



トウガラシ (複製)

らっと揚げたエビと乾燥した唐辛子の炒め物」がこの十数年のあいだに中国の料理書で紹介されるようになった。現在、日本の四川料理店では、辣子蝦を出す店もある。それは、近年、日本で本格志向の客と店が増加し、花椒（四川山椒）や唐辛子など四川省で好まれる香辛料を積極的に使用した「本場四川料理」が広がっている傾向にあるからだと言察される。

### 越境する食材

料理が越境するとき、食材もまた越境する。さらに、食材の移動に伴い、あらたな食文化が生み出されることもある。エビチ



中国にある四川料理店で出された辣子蝦 (2018年)

民博の展示場には世界各地の食文化に関するモノが数多くある。展示資料そのものは動かないが、こと食文化に関しては地域を横断する性格が際立っている。展示場を一周すると、人とともに移動する食と、それが変容するありさまを実感することができ

### 越境する味

まず、以下の展示から、味の移動について見てみよう。

- ・日本の文化展示「多みんぞくニホン」セクション、埼玉県にあるケbab店の看板
- ・ヨーロッパ展示「変動するヨーロッパ」セクション、ケbab味麺（生産地：ポランド）とキムチ味麺（生産地：ベトナム）のパッケージ
- ・朝鮮半島の文化展示「食の文化」セクション、キムチを作るプロセスの写真パネル

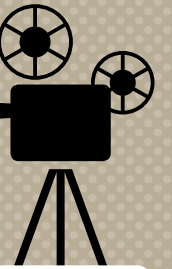
これらを見てみると、ケbabの味は、トルコから日本やポーランドなどの国に渡り、キムチの味は、韓国を出てベトナムやヨーロッパまで広がっていることがわかる。他にも、中国地域の文化展示では、華僑・華人によって中華料理の味が地球上の他の地域へ広がったことが見てとれる。こうした越境する味は、味覚としての味というよりも辣子蝦も、唐辛子を抜きにしては考えられない。

アメリカ展示には、中南米原産のトウガラシ（複製）がある。四川省にある成都博物館の説明によると、唐辛子は、明の時代に中南米から中国東南の沿岸部に渡って、清の時代に湖南省と広東省から移住してきた人たちによって四川省に伝来した。その後、唐辛子や花椒を用いた麻辣（しびれるような辛さ）を特徴とする現代四川料理が生まれた。さらに、この四川料理が日本に渡り、エビチリが創作された。このように、日本におけるエビチリの誕生とその広がりは唐辛子の伝播と間接的につながっている。

また、唐辛子は朝鮮半島に伝えられ、古くから作られていた漬物に香辛料として活用された。そこから現在見られる一般的なキムチが誕生し、その作る過程であるキムジャン（キムチづくり）が二〇一三年にユネスコ無形文化遺産に登録された。つまり、朝鮮半島に渡った唐辛子は韓国のキムジャンの誕生にも直接的に貢献した。

このように、越境した食文化は地域に応じた変容を遂げるが、この変容こそが、人とモノを通じて形成される地域間のつながりの証しでもあれば、あらたな食文化または文明の創造にもつながっていくといえよう。ぜひ民博の展示場で世界の食の探検を試みてほしい。





## 重層的な人物描写が描き出す、 秘められた苦悩の歴史

不寛容な多様性の国、レバノン

レバノンという国名を聞いて、具体的なイメージが浮かぶ日本人はそれほど多くはなからう。一九六〇年代から七〇年代の大学紛争を経験した世代ならば、PFLP（パレスチナ解放人民戦線）と共闘した日本赤軍が潜伏していた国として記憶しているかもしれない。岐阜県ほどの面積しかないこの国は、起伏に富んだ豊かな美しい自然と、マイノリティを多く抱える宗教的多様性で、中東ではほかに類を見ない存在である。

ところが、多様性は必ずしも寛容性とは結びつかない。むしろ逆であることは、今日アメリカで蔓延する排外主義を見てもあきらかであろう。レバノンでも、国民の四割を占めるキリスト教徒の最大集団であり、政治的に優遇されているマロン派カトリックが、宗教的アイデンティティに基づく過激な排外的ナショナリズム、通称フェニキア主義を唱えてきた。その攻撃対象となってきたのが、一九四八年以降この国に流入してきた、パレスチナ難民である。両者の争いこそが、一九七五年から一五年間続いたレバノン内戦の発端であり、無国籍者として差別を受けるパレスチナ難民を蛇蝎のごとく嫌うマロン派は、いまだに多い。

「判決、ふたつの希望」は、マロン派の自動車修理工場経営者トニーと、非正規雇用の工事現場監督である



バナナ農園が眼下に広がる、レバノン南部の田園風景。トニーの故郷ダムール村も、このような村だったのだろう（2012年）

の初期作品に撮影助手として参加しており、そこで学んだとおぼしき重層的な人物表現が、レバノンの歴史の暗部を描くうえでびたりとはまっている。

国を牛耳る社会的強者の傲慢なマロン派と、弱者であるパレスチナ難民の不公平な争い。二人の対立は、一見そう見られがちだ。しかしそんな日本のニュース解説番組が好みそうな皮相的な見方では、レバノン、ひいては中東で起きている事象は読み解けない。

言っただけなら侮辱のひとこと

トニーの家の違法建築をめぐり、トニーとヤーセル

じつはトニーは、パレスチナ勢力から報復攻撃を受け、住民が虐殺されたベイルート郊外の村ダムールの出身である。父親とともにからも生き延びた体験は、彼のトラウマとなっていた。忘れてくとも忘れられぬ過去を、彼は自分からは決して口にしないのだが、トニーの正当性を強調したい弁護士によって、期せずして公判で暴露されてしまう。ダムール村の事件は闇に葬られ、レバノンでもほとんど忘れ去られてきた。フェニキア主義に熱狂していたトニーもまた、じつは国から見捨てられた存在であるという皮肉。しかもその現実を残酷に突きつけるのは、裕福で傲慢な、まさに社会的強者のマロン派の弁護士である。排外主義がもたらすのは、幾重にも渡る分断でしかないのである。

正義なき世界を救う人情

きわめて個人的であったトニーとヤーセルの争いは、公判が進むにつれて彼らの手を離れ、国中を巻き込んだナショナリズムの泥仕合を引き起こしてしまう。しかし外野で繰り広げられる争いをよそに、二人は仕事に真摯に向き合う職人気質を互いのなかに見だし、ひそかな共感をおぼえる。そしてあるとき、トニーはヤーセルに小さな厚意を見せる。この出来事を機に、トニーへの軽蔑と怒りを秘めていたヤーセルの態度にも変化があらわれ、トニーの鬱屈した感情を吐き出させるため、ある行動をとるに至るのだ。

正義なき世界を救うのは、結局のところ人の情、相手の境遇をわがこととして思いやる感情なのかもしれない。



トニーは同じマロン派の老練な辣腕弁護士、ワジュディーに弁護を依頼する。いっぽうヤーセルには人権派の若手女性弁護士がつくが、この二人の弁護士の関係性にもレバノン社会の今が投影されている  
©2017 TESSALIT PRODUCTIONS\_ROUGE INTERNATIONAL\_EZEKIEL FILMS\_SCOPE PICTURES\_DOURI FILMS  
PHOTO ©TESSALIT PRODUCTIONS\_ROUGE INTERNATIONAL

は対立し、互いを侮辱する。フェニキア主義に傾倒し、相手がパレスチナ難民だと察して横柄に振る舞うトニーに対し、ヤーセルが発したひとは「ポン引き野郎」。もちろん面と向かって言うてはいけないことばだが、陰口を叩くときは頻用され、別にめずらしくもなんともない。ところがヤーセルに対し、トニーが発したひとは衝撃的だ。直訳すると、「お前の父親の系譜が、シャロンに根絶やしにされていればよかったのに」。シャロンとは一九八二年、マロン派極右軍事組織「レバノン軍団」と結託したイスラエル軍がレバノン内戦に介入し、パレスチナ難民キャンプでの虐殺を招いたときの国防相である。彼はのちにイスラエル首相となって、パレスチナとの和平と逆行する政策を強引に推進したことで知られる。これはヤーセル本人のみならず、その血族すべてに対する侮辱であり、逆上したヤーセルはトニーを殴打、告訴されてしまう。トニーの部下たちが一様に彼の肩をもち、気炎を揚げるいっぽうで、身重の妻や父親がトニーの態度を厳しく非難する場面が印象的だ。マロン派信徒にもさまざまな見解があることがわかるのだが、ではなぜトニーはこれほどまでにパレスチナ難民に

対して攻撃的なのか。



# ことばの迷い道

## 多言語の国 インドの教室にて

おかだ えみ  
岡田 恵美

民博 人類基礎理論研究部

新型コロナウイルス感染症が拡大傾向にあった今春、「クラスター」「ソーシャルディスタンス」「ロックダウン」といったことばを日常的に耳にするようになった。当初は聞き慣れないカタカナ語の多用に対して、なぜ日本語を使用しないのかという意見も少なからずあったが、連日のニュース報道で瞬く間に浸透した。これは、世界規模の緊急事態に対し、外来語の訳語が間に合わずカタカナ語として定着した事例といえるが、こうした一連のことばをめぐる現象は、ふとわたしがインドに留学した当時を思い起こさせた。

北インドの音楽理論を学ぶために選んだ留学先は、首都ニューデリーの芸術学校であった。初日の出来事は今も鮮明に記憶に残っている。校長先生への挨拶後、弦楽器シタールの教室で待機していると、次々と学生たちがやってくる。「どこから来たか?」「一人で来たのか?」「遠い国に来て怖くないのか?」「お父さんの職業は何か?」と、ヒンディー語での矢継ぎ早な質問責めにやや困惑していると、後にグルベン(師匠を同じくする姉弟子)となる女子学生が逐一英語に通訳して世話を焼いてくれる。クラスメイトは地方出身者も多く、それぞれの母語はヒンディー語のほか、パンジャーブ語、マイテリー語、ベンガル語、マラーティー語、ウルドゥー語など、多言語国家であるインドが象徴されている。そうこうしているうちに、師匠の登場である。教室の空気が一変して張りつめ、学生たちは順々に師匠の前に跪ぎ、師匠の足に手を触れ、頭を低く下げて敬意を示す。芸術学校であつても、グル・シシャ・パランパラとよばれる

る伝統的な師弟制度が根幹にあり、こうした挨拶は重要である。師匠は話し好きで、指導の合間も世間話から演奏会の裏話までと話題は豊富である。また不思議なことに、会話の最中であつても英語とヒンディー語を前触れもなく自然に切り替えるのである。これはインドでは頻繁に見られる光景で、一方がヒンディー語で話し、他方が英語で応答して会話が成立している場面もめずらしくない。また冒頭のカタカナ語のように、英単語もヒンディー語の日常会話に躊躇なく盛り込まれる。

留学初日で覚えているのは、「翌日の授業までにゼロックス・カロー(ゼロックスしなさい)」という師匠からのことばであった。授業後にグルベンに連れられ、学校裏の売店で手書きの譜面を複写した。要はゼロックスという社名・商品名が、コピー機で複写するという動詞として使用されているのである。同様の事例は数多く、例えば、インドにおける近年の教育熱の高まりのなかで、電子鍵盤楽器が若年層の習い事として浸透している現象を調査したとき、「ヤマハのカシオ」ということばを何度か耳にした。これはヤマハ製の電子キーボードという意味であり、カシオ製の小型鍵盤楽器が九〇年代以降にインドで爆発的な人気を博した結果、その社名が電子鍵盤楽器の総称として定着した例である。日本でも同様に社名のタッチキスが浸透した例などがあるが、グローバルな社会ではさまざまな外来語が次々と言語に組み込まれていく。そこにもローカルな独自の導入背景やあらたな意味の上書きが見られ、ことばは本当に生きものだと思ふのである。



**編集後記**

不幸や災いがふりかかると、人は納得のいく要因や説明・解釈を求めたがる。災因論とよばれるもので、不幸や災いを受けとめ、平常に戻るのに欠かさない文化的しくみだ。一向に不安が解消されない新型コロナウイルス感染症を想起すれば、思い当たるかもしれない。本号の特集「世界の地相術」は、土地や家に吉凶の要因を求め、さまざまな「伝統科学」の深奥な世界を詳らかにしてくれる。そうした民俗知の体系が、地理学や天文学の礎となったという指摘も興味深い。「迷信」とされ、科学的な知識に置き換わった感がある地相や家相が、人びとから再び注目される時代とは、どのような世相を反映するのか。相つながりて、想像を膨らませてみたくもなる。

みんぱくでは、新型コロナウイルス感染症の拡がりをうけ延期していた、梅棹忠夫生誕100年記念企画展「知的生産のフロンティア」を開催している。10月1日からは特別展「先住民の宝」も始まる。この機会にぜひ、みんぱくに足を向けてほしい。6月に立ち上げた2本目のトーテムポールも秋空に輝いている。

(南真木人)

みんぱくをもっと楽しみたい方のために  
**国立民族学博物館友の会のご案内**

友の会は、みんぱくの活動を支援し、博物館を楽しく積極的に活用するためにつくられました。毎月『月刊みんぱく』をお届けするほか、さまざまなサービスをご用意しております。

**維持会員・正会員**

『月刊みんぱく』の送付／友の会機関誌『季刊民族学』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加／研究者同行の国内外研修旅行への参加 など

**ミュージアム会員**

『月刊みんぱく』の送付／本館展示の無料観覧／特別展観覧料の割引／友の会講演会への参加 など

繰り返し入館できる**みんぱくフリーパス**や、学校・学部単位で利用できる**キャンパスメンバーズ**など各種会員種別もございます。目的にあわせてご利用ください。

詳細は、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。  
(電話 06-6877-8893 / 平日9:00～17:00)



●表紙：台湾、新竹市の廟における「安龍転火」の儀式。弱った龍脈（土地の気脈）に力を与え、運気を好転させている（撮影：河合洋尚、2019年）

**次号の予告**

特集

**「世界温泉めぐり」(仮)**

月刊みんぱく 2020年10月号

第44巻第10号通巻第517号 2020年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 **国立民族学博物館**  
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1  
電話 06-6876-2151

発行人 園田直子  
編集委員 南真木人(編集長) 上羽陽子 齋藤晃  
菅瀬晶子 三島禎子 吉岡乾  
デザイン 宮谷一欵 長岡綾子  
制作・協力 一般財団法人 千里文化財団  
印刷 株式会社 遊文舎

\*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。  
\*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

みんぱくフェイスブック  
みんぱくツイッター  
みんぱくインスタグラム  
みんぱくYouTube

<https://www.minpaku.ac.jp/>

<https://www.facebook.com/MINPAKUofficial>

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>

<https://www.instagram.com/MINPAKUofficial/>

<https://www.youtube.com/user/MINPAKUofficial>

